

## 革靴の怪

泉鏡花作

—

「そんな事があるものですか。」

「いや、眞個だから變なんです。馬鹿々々しい、何、詰らないと思ふ後から聲がします。」

「聲がします。」

「確かに聞えるんです。」

と云つた、私たち二人は、其の晩、長野の町の一大構の旅館の奥の、母屋から板廊下を遠く隔てた難産敷らしい十疊の廣間に泊つた。

はじめ、停車場から俵を二臺で乗着けた時、帳場の若いものが、

「入らつしやい、何うぞ此方へ。」

で、上靴を穿かせて、つる／＼する廣い取着の二階へ導いたのであるが、其處から、も一ツつか／＼と階子段を上つて行くので、連の男は一段踏掛けなから慌しく云つた。

「三三階か。」

「へい、四四階でございます。」と横に開いて揉  
手をする。

「其奴は堪らん、下座敷は無いか。――貴  
方は如何です。」

途中で見た上阪の中途に、ぱり／＼と月に凍てた  
廻縁の總硝子。紅色の屋號の電燈が怪しき流星の如  
き光を放つ。峰から見透しに高い四階は落着かない。

「私も下が可い。」

「致しますると、お氣に入りますか何うでございますま  
せうか。些と其の古びて居りますので。他には唯今  
何うも、へい、へい。」

「古くつても構はん。」

とに角、座敷はあるので、漸と安心したやうに言  
つた。

人の事は云はれないが、連の男も、身體つきから  
様子、言語、肩の瘠せた處、色澤の悪いのなど、第  
一、屋財、家財、身上ありツけを詰込んだ、と自ら  
稱へる古革靴の、象の胴切りにしたやうな格外の大  
さで、然もぼやけた工合が、何う見ても神経衰弱と

云ふのに違ひない。

何と　そして、此の革靴の中で聲がする、と  
夜中に騒ぎ出したらうではないか。

私は枕を擡げずには居られなかつた。

時に、當人は、最う蒲團から摺出して、茶縞に浴  
衣を襲ねた寢着の扮装で、ごつ／＼して、寒さは寒  
し、もゝ尻に成つて、肩を怒らし、腕組をして、眞  
四角。

で、二間の　此には掛ものが掛けてなかつ  
た　床の間を見詰めて居る。其處に件の大革  
靴があるのである。

白ぼけた上へ、ドス黒くて、其の身上ありただ  
と云ふ、だふりと膨だみを揺つた形が、元來、仔細  
の無い事はなかつた。

今朝、上野を出て、田端、赤羽　蕨を過ぎる  
頃から、向う側に居を占めた、其の男の革靴が、私  
の目にフト氣に成りはじめた。

わたしは妙な事を思出したのである。

やがて、十八九年も経つたらう。小兒が些と毛を伸ばした中僧の頃である。……秋の招魂祭の、其も眞晝間。兩側に小屋を並べた見世ものゝ中に、二ヶ所目覺しい看板を見た。

血だらけ、白粉だらけ、手足、顔だらけ。刺戟の強い色を競つた、夥多の看板の中にも、其のくらゐ目を引いたのは無かつたと思ふ。

續き、上下に凡そ三四十枚、極彩色の繪看板。雲には銀砂子、襖に黄金箔、引手に朱の總を提げるまで手を籠めた……。芝居がかりの五十三次。

岡崎の化猫が、白髪の子に血を滴らして、破簾よりも顔の青い、女を宙に銜へた繪の、無慙さが眼を射る。

「さあ／＼看板に無い處は木曾もあるよ、木曾街道もあるよ。」

と云る。

が、其の外には何も言はぬ。並んだ小屋は軒別に、聲を振立て、手足を揉上げ、躍懸つて、大砲の音でいろはなび色花火を撒散らずが如き鳴物まじりに人を呼ぶのに。

此の看板の前にのみ、洋服が一人、羽織袴が一人、眞中に、白襟、空色紋着の、廂髪で痩せこけた女がひとりまじり、都合三人の木戸番が、自若として控へて一言も言はず。

唯、時々

「さあ／＼看板に無い處は木曾もあるよ、木曾街道もあるよ。」

とばかりで、上目でじろりとお立合を見て、默然として澄まし返る。

容體が然も、ものあり氣で、鶴の一聲と云ふ趣。

■き騒いで呼立てない、非凡の見識おのづから顯れて、裡の面白さが思遣られる。

うか／＼と入つて見ると、こはいかに、と驚くにさへ張合も何にもない。表飾りの景氣から推せば、場内の廣さも、一軒隣のアラビヤ式と銘打つた競馬ぐらゐはあらうと思ふのに、筵圍ひの廂合の路地へ入つたやうに狭く、薄暗い。

正面を逆に、背後向きに見物を立たせる寸法、舞臺と云ふのが、新筵二三枚。

前に青竹の埒を結廻して、其の筵の上に、大形の古革靴唯一個 ■しても視めても、雨上りの濕氣た地へ、藁の散ばつた他に何にも無い。

中へ何を入れたか、だぶりとして、づしりと重畳を溢まして、筵の上に仇光りの陰氣な光澤を持つた鼠色の其の革靴には、以來、大海鼠に手が生えて胸へ乗かゝる夢を見て魘された。

梅雨期の所爲か、其時はしと／＼と皮に潤濕を帶

びて居たのに、年數も経つたり、今は皺目がゑみ破れて乾燥いで、宛然乾物にして保存されたと思ふまで、色合、恰好のまゝの大革靴を、下にも置かず、矢張り色の褪せた鼠の半外套の袖に引着けた、其の一人の旅客を認めたのである。

私は熟と視て、——長野泊りで、明日は木曾へ廻らうと思ふ、たまさかの此の旅行に、不思議な暗示を與へられたやうな氣がして、何故か、變な、擦つたい心地がした。

然も、其の中から、怪しげな、不氣味な、凄いやうな、恥かしいやうな、又謎のやうなものを取出して見せられさうな氣がして成らぬ。

少くとも、あの、繪看板を疊込んで持つて居て、汽車が隧道へ入つた、眞暗な煙の裡で、颯と化猫が女を噛む血だらけな緋の袴の、眞赤な色を投出しさうに考へられた。

で、何處まで一所に成るか、・・・・・稀有な、妙な事がはじまりさうで、危つかしい中にも、内々

少すくなからぬ期待きたいを持たせられたのである。

けれども、其その男をとこを、年配ねんばい、風采ふうさい、あの三人にんの中なかの  
木戸番きどばんの一人ひとりだの、興行こうぎやうぬしだの、手品師てじなしだの、所きた  
禱うして、山伏やまぶしだの、何なにを間違まちがへた處ところで、慌あわて、  
魔法まほうつかひだの、占術家うらないやだの、又弘盗またがうたう或あるひは殺人犯さつじんはん  
で、革靴かばんの中なかへ輪切わぎりにした女をんなを油紙あぶらがみに包つんで詰込つめこ  
で居ゐようの、従したがつて、探偵たんていなどと思おもつたのでは決けつ  
てない。

一目見ひとめても知しれる、其その何省なにしやうかの官吏くわんりである事ことは。  
―― やがて、知己ちかづきに成なつて知しれたが、都合つがふあつ  
て、飛騨ひだの山やまの中なかの郵便局いうびんきょくへ轉任てんにんと成なつて、其その任にん  
に趣おもむく途中とちうだと云いふ。―― 其それに聊いさか疑うたがはない。が、  
持主もちぬしでない。

這奴、窓硝子の小春日の日向にしろ／＼と、光澤を漾はして、怪しく光つて、ト構へた體が、何事をか企謀んで居さうで、其の企謀の整ふと同時に、驚破事を、仕出來しさうで成らなかつたのである。

持主の旅客は、唯黙々として、俯向いて、街樹に染めた錦葉も見ず、時々、額を敲くかと思ふと、兩手で熟と頸窪を壓へる。やがて、中折帽を取つて、ごしや／＼と、や／＼伸びた頭髪を引掻く。卷蓑に點じて三分の一を吸ふと、半三分の一を瞑目して黙想して過して、はつと心着いたやうに、火先を斜に目の前へ、ト翳しながら、熟と灰に成るまで凝視めて、慌て／＼、ふつ／＼と吹落して、後を詰らなさうにポタリと棄てる。．．．．．すぐ其の額を敲く。續いて頸窪を兩手で壓へる。

其を繰返すばかりであるから、此が企謀んだ處で、自分の身の上的事に過ぎぬ。敢て世間を何うしようなどと云ふ野心は無ささうに見えたのに――

お供の、奴の腰巾着然とした件の革靴の方が、物  
騷で成らないのであつた。

果せる哉。

小春風のほか／＼とした可い日和の、午前十一時  
半頃、汽車が高崎に着いた時、彼は向側を立つて來  
て、辨當を買つた。そして折を片手に、少時硝子窓  
に頬杖をついて居たが、

「酒、酒。」

と威勢よく呼んだ、其の時は先生奮然たる態度で、  
のぼせるほどな日に、蒼白い顔も、もう酔つたやう  
に赫と勢づいて、此の日向で、かれこれ爛の出來て  
居るらしい、ペイパアの乾いた壇の膚觸わも暖さう  
な二合詰を買つて、此を背廣の腋へ抱へるが如くに  
して席へ戻る、と忙はしく革靴の口に手を掛けた。

私はドキリとして、をかしく時めくやうに胸が躍  
つた。九段第一、否、皇國一の見世物小屋へ入つた、  
いつかの時のやうに。

しかし、細目を開けた、大革靴の、其も、僅かに

口許ばかりで、彼が取出したのは一冊の赤表紙の旅  
行案内。五十三次、木曾街道に縁のない事はないが。  
其を熟と、酒も飲まずに凝視めて居る。

私も辨當と酒を買った。

大な蝦蟇とでもあらう事か、革靴の吐出した第一  
幕が、旅行案内ばかりでは棧敷で飲むやうな氣はし  
ない、が蓋し其は僭上の沙汰で。

「まづ、飲まう。」

其の氣で、席へ腰を掛直すと、口を抜かうとした  
酒の香より、は、と面を打った、懐しく床しい、留  
南奇がある。

此の高崎では、大分旅客の出入りがあつた。

其處此、疎に透いて居た席が、ぎつしりと成つて  
―― 二等室の事で、云ふまでもなく荷物にものが小兒  
よりは厄介やくがいに、中には大人おとなほど幅はばをして彼方あち此方こちに  
挟はさまつて。勿論もちろん、知合しりあひに成つたあとでは失禮しつれいながら、  
件くだんの大革靴おほかばんも其その中うちの數かずの一つではあるが――  
一人ひとり、袴羽織はかまはおりで、山高やまたかを被かぶつたのが仕切しきりの板戸いたどに突  
立つて居るのさへ出來て居た。

わたしとは丁ど正面、彼の男と隣合つた、其處へ、麗な女が一人腰を掛けたのである。

待て、たゞ艶麗な、と云ふと何處か世話で居て、やゝ婀娜めく。

内端に、品よく、高尚と云はう。

前挿、中挿、鼈甲の照りの美しい、華奢な姿に重

さうな其の櫛笄に對しても、のん氣に婀娜だなどゝ云つては成るまい。

四

一目見ても知れる、濃い紫の紋着で、白襟、緋の  
 長橋祥。水の重りさうな、しかし其の貞淑を思はせ  
 る初々しい、高等な高島田に、鼈甲を端正と堅く挿  
 した風采は、桃の小道を駕籠で遣りたい。嫁に行か  
 うとする女であつた。

指の細く白いのに、紅いと、緑なのと、指環二つ  
 嵌めた手を下に、三指ついた状に、裾模様の松の葉  
 に、玉の折鶴のやうに組合せて、褌を深く正しく居  
 ても、溢るゝ裳の紅を、しめて、踏みくゞみの雪の  
 羽二重足袋。幽に震へるやうな身を緊めた爪尖の塗  
 駒下駄。

將に嫁がむとする娘の、嬉しさと、恥らひと、心  
 遣ひと、恐怖と、涙と、笑とは、たゞ其の深く差俯  
 向いて、眉も目も、房々した前髪に隠れながら、殆  
 ど、顔のやうに見えた眞向ひの島田の鬢に包まれて、  
 簪の穂に顯るゝ。……窈窕たる哉風采、花嫁  
 を祝するには此の言が可い。

然り、窈窕たるものであつた。

中にも淑ましげに、可憐に、床しく、最惜らしく見えたのは、汽車の動くまゝに、玉の緒の揺るゝよ、と思ふ、微な元結のゆらめきである。

耳許も清らかに、玉を伸べた頸許の綺麗さ。うら  
すく紅の且つ媚かしさ。

袖の香も目前に漾ふ、さしむかひに、餘り間近な  
ので、其の裏恥かしげに、手も足も緊め惱まされた  
やうな風情が、宛然、我がためにのみ、然うするの  
であるやうに見て取られて、私は暫時、壇の口を抜  
くのを差控へたほどであつた。

汽車に連る、野も、畑も、畑の薄も、薄に交る紅  
の木の葉も、紫籠めた野末の霧も、霧を刷いた山々  
も、皆嫁く人の背景であつた。迎ふる如く、送るが  
如く、窓に燃ゆるが如く見え初めた妙義の錦葉と、  
蒼空の雲のちら／＼と白いのも、ために、紅、白粉  
の粧を助けるか如くであつた。

一つ、次の最初の停車場へ着いた時、――下  
りるものはなかつた。――私の居た側の、出入り  
口の窓へ、五ツ六ツ、土地のものらしい鄙めいた男  
女の顔が押累つて室を覗いた。

累りあふれて、ひよこ／＼と瓜の轉がる體に、次  
から次へ、又二ツ一三ツ頭が来て、額で覗込む。

私の窓にも一つ来た。

唯見ると、板戸に凭れて居た羽織袴が、

「やあ！」

と耳の許へ、山高帽を仰向けに脱いで、禮をした  
のに續いて、四五人一齊に立つた。中には、袴らし  
い風呂敷包を大な懐中に入れて、茶紬を着た親仁も  
居たが――揃つて車外の立合に會釋した、いづ  
れも縁女を送つて来た連中らしい。

「あのや、あ、一寸御挨拶を。」

と其の暗まで、肩が痛みはしないかと、見る目も  
氣の毒らしいまで身を緊めた裾模様の紫紺、――  
比の方が適當であつた、前には濃い紫と云つたけれ

どもー肩かたに手てを掛かけたのは、近頃ちかごろ流行はやる半はんコ  
オトを幅はび廣ひろに着きた、横よこ肥ぶとりのした五十いそ恰かつ好かう、骨ほね組ぐみの  
遅たましい、此この女をんなの足た袋びは、だふよこついて汚よこれて居あ  
た・・・・赤あから顔がほの片かた目め眇ちみで、其その眇ちみの方はうをト上うえ  
へ向むけて澁しぶのついた薄うす毛けの圓まる鬚まげを斜はす向つかひに、頤あごを引ひん曲ま  
げるやうにして、嫁よめ御ごが仰うつ向むけの島しま田だからはじめて、  
室内しつないを白しろ目め澤たく山さんで、虻あぶの飛とぶやうに、じろ／＼と飛とび  
廻ましにニみして居あたのが、肥ふとつた膝ひざで立たち状さまに然さうし  
て聲こゑを掛かけた。

五

少し揺るやうにした。

指に平打の黄金の太く遅ましいのを嵌めて居た。

肖も付かぬが、乳母ではない、繼しいなかと見たが、母親に相違あるまい。

白襟に消えもしさうに、深くさし入れた頭で幽に頷いたのが見えて、手を膝にしたまゝ、肩が撓つて、緞子の帯を胸高にすらりと立つたが、思ふに違はず、品の可い、些と寂しいが美しい、瞼に颯と色を染めた、薄の綿に撫子が咲く。

ト挨拶をしさうにして、赭ら顔に引添つて、前へ出ると、ぐい、と袖を取つて引戻されて、ハツと胸で氣を揉んだ褌の崩れに、捌いた紅、紅絲で白い赭先を、きしと劃つたやうに、其處に駒下駄が留まつたのである。

南無三寶！ 私は恥を言はう。露に濡羽の烏が、月の桂を銜へたやうな、鼈甲の花の照榮える、目前の島田の黒髪に、魂を奪はれて、あの、其の、旅客

を忘れた。旅行案内を忘れた。いや、大切な件の大革靴を忘れて居た。

何と、其の革靴の口に、紋着の女の袖が挟つて居たではないか。

仕出来した、然ればこそはじめた。

私は敢て、這個老怪の齒が引銜へて居たと言はう。

いま立ち科の身じろぎに、少し引かれて、ずる／＼と出たが、女が留まるとゝもに、床へは落ちもせず、がしやりと据つた。

重量が、自然と傳つたらう、靡いた袖を、振返つて、横顔で見ながら、女は力なげに、すつと原の座に返つて、

「御免なさいまし。」

と呼吸の下で云ふと、襟の白さが、楓と紫を蔽ふやうに、はなじろんで顔をうつむけた。

赤ら顔は見免さない。

「お前、何したのかねえ。」

彼の男はと見ると、丁ど其の順が来たのか何うか、くしゃ／＼と両手で頭髪を搔しやなぐる、中折も床に落ちた、夢中で引籠る。

「革靴に挟つた。」

「何うしてな。」

と二三人立掛る。

窓へ、や、えんくらさ、と攀上つた若いものがあ  
る。

驛夫の長い腕が引拂つた。

笛は、胡桃を割る駒鳥の聲の如く、山野に響く。

汽車は猶豫はず出た。

一人發奮を啖つて、のめりかゝつたので、雪類  
を打つたが、其も、赤ら顔の手も交つて、三四人大  
革靴に取かゝつた。

「此は貴方のですか。」

で、其の答も待たずに、口を開けようとするので  
ある。

なか／＼以つて、何うして古狸の老武者が、そん  
な事で行くものか。

「此は堅い、堅い。」

「巖丈な金具ぢやえ。」

それ言はぬ事ではない。

「こりや開かぬ、鍵が締まつてるんぢやい。」

と一先づ手を引いたのは、茶紬の親仁で。

成程、と解めた風で、皆白けて控へた。更めて、

新しく立ちかゝつたものもあつた。

室内は動揺む。嬰兒は泣く。汽車は轟く。街樹は

流るゝ。

「誰の麤勿ぢやい。」

と赭ら顔は愈々赤く成つて、例の白目で、じろり、

と一ツづゝ、女と、男とを見た。

彼は仰向けに目を瞑つた。瞼を掛けて、朱を漉ぐ、

――二合壇は、帽子とゝもに倒れて居た――

そして、しかと腕を拱く。

女は頤深く、優しらしい眉が前髪に透いて、唯差

仰向く。

「此の次で下車のぢやに。」

と何故か、わけも知らない娘を賤めるやうに云つて、片目を男にじろりと向け直して、

「何てまあ、馬鹿しい。」

と當着けるやうに言つた。

が、まだ二人とも何にも言はなかつた時、連と目配せをしながら、赭ら顔は更めて、男の前に故とらしく小腰、――と云つても大きい――を居めた。

突如啖着き兼ねない劍幕だつたのが、翻つて此の慇懃な態度に出たのは、人は須らく渠等に對して洋服を着るべきである。

赭ら顔は悪く切口上で、

「旦那、何方の麤勿か存じまじないけれども、で、ございますね。飛んだことございます。此娘は嫁にやります大切な身體でございます。はい、鍵をお出し下さいまし、鍵をでございますな、旦那。」

聲が眉間を射たやうに、旅客は苦しげに眉を顰めながら、

「鍵はありません。」

「ございませんと？」

「鍵は棄てました。」

とぶる／＼と胸震ひをすると、翼を開いたやうに肩で搔縮めた腕組を衝と解いて、一度投出す如くばかりと落した。其の手で、挫ぐばかり確と膝頭を掴んで、呼吸が切れさうな咳を續けざまにしたが、決然として轟乎と立つた。

「一寸御挨拶を申げます、……同室の御婦人、紳士の方々も、失禮ながらお聞取を願ひたうございます。私は、こゝに隣席においでに成る、竊窺たる淑女。」

彼は窺窺たる淑女と云つた。

「此の令嬢の袖を、袂をでございます。口へ挟みました旅行革鞆の持主であります。挟んだのは、諸君。」

「とニす目か空さまに天井に上つて、申兼ねましたが私です。尤もはじめか

ら、もくろんでいたしたものではありません。袂たもとが革かば靴くつの中なかに入はいつて居ゐたのは偶然ぐうぜんであつたのです。

退屈たいくつまぎれに見みて居ゐりました旅行りょこう案内あんないを、もとへ突つ込んで、革靴かばんの口くちをかしりと銜くはへさせました時とき、フト柔なめかな、滑なめかな、ふつくりと美うつくしいものを、きしりと縊くつて、引ひ緊きめたと思おもふ手應てこたへがありました。

眞白まつしろな薄すくの穂ほか、窓まどへ散ちり込んだ錦葉もみぢの一ひと葉は、散際ちりぎはのまだ血ちも呼い吸きも通かよのを、引ひ挟はさんだのかと思おもつたのは事實じじつであります。

其それが、紫むらさに緋ひを襲かねた、斯かくの如ごとく盛粧せいしやうされた片袖かたそでの端はし、．．．即すなはち人間界にんげんかいに於おける天人てんにんの羽衣はごろもの羽はねの一枚まいであつたのです。

諸君しよくん、私わたしは謹じんんで、此これなる令嬢れいぢやうの淑徳しゆくとくと貞操ていさうを保ほ證しょういたします。．．．令嬢れいぢやうは未いまだ嘗かつて一度ひとも私わたし如ごときものに、唯姿ただすがたさへ御見おみせなすつた、否いや、寧むしろ見みられた事ことさへ有あるなららない。

東京とうきやうでも、上野うへのでも、途と中ちゆうでも、日本國にっぽんこくに於おいて、

わたくし  
私わたくしが此この令嬢れいちやうを見みましたのは、今いましがた革靴かばんの口くちに  
袖そでの袂はきまつたのをはじめて心着こころづきました其その瞬間しゆんかんに  
於おけるのみなのです。

お見受みうけ申まをすと、此これから結けつ婚こんの式しきにお臨のぞみに成なる  
やうなんです。

いや、やうなんですすぐらゐだつたら、私わたしも恚かやう  
な不ふ埒らち、不ふ心得こころえ、失しつ禮れいなことはいたさなかつらうと  
思おもひます。

確たしかにお縁えんづ着ちきに成なる。．．．．．雙さう方ほうの御親屬ごしんぞくに  
向むかつて、御縁女ごえんぢよの純潔じゆんけつを更あらためて確證かくしやういたします。室しつ  
内ないの方々かた／＼も、願ねがはくは此この令嬢れいちやうのためほしに保しょう證じようにお立た  
ちを願ねがひたいのです。

餘あまり唐突たうとつな狼籍らうぜきですから、何なにか其その縁組えんぐみについて、  
私わたくしの爲ために、意趣遺恨いしゆゐこんでもお受うけに成なるやうな前事ぜんじが  
あるかと思おもはれに成なつては、尚なほ此この上うへにも身みの置お  
き處ところがありませんから　　ー　　ー

## 七

「實は、寸毫と雖も意趣遺恨はありません。けれども、未練と、執着と、愚癡と、卑劣と、惡趣と、怨念と、もつと直截に申せば、狂亂があつたのです。狂氣が。」

と吻と息した。

「汽車の室内で隣合つて一目見た、早や忽ち、次か、二ツ目か、少くとも其の次の驛では、人妻にお成りに成る。プラットフウムも婚禮に出迎の人橋で、直ちに婿君の家の廊下をお渡りなさるんだと思ふと、つい知らず我を忘れて、カチリと錠を下しました。乳房に五寸釘を打たれるやうに、此の御縁女はお驚きになつたらうと存じます。優雅、溫柔でおいでなさる、心弱い女性は、然やうな狼籍にも、人中の身を恥ぢて、端なく聲をお立てに成らないのだと存じました。」

しかし、只今、席をお立ちに成つた御容子を見れば、其の時まで何事も御存じではなかつたのが分つ

て、お心遣ひの時間が五分たりとも少なかった、のみならず、お身體の一箇處にも紅い點も着かなかつた事を、――實際、錠をおろした途端には、髪一條の根にも血をお出しなすつたらうと思ひました。――此の祝言を守護する。黄道吉日の手に感謝します。

けれども、其も唯僅の間で、今の思は何うおいでなさるだらうと御推察申上げるばかりなのです。

自白した罪人は此處に居ります。遁も隠れもしませんから、愕りながら、御萱堂とお見受け申します。年配の御婦人は、私の前をお離れに成つて、お引添ひの上。傷心した、かよわい令嬢の、背を抱く御介抱が願ひたい。」

一室は悉々く目を注いだ、が、淑女は崩折れもせず、柔な襟はづれの、彩ある横縦の微線さへ、たゞ美しく珠に刻まれたものゝやうである。

ひとり彼男のみ、堅く突立つて、頬を傾げて、女を見返ることさへし得なかつた。

赭ら顔も足も動かさなかつた。

「剩へ、亂暴とも狼籍とも申しやうのない、未練と、執着と、愚癡と、卑劣と、惡趣と、怨念と、尚ほ其上に殆ど狂亂だと申しました。」

外ではありません。其は革靴の鍵を棄てた事です。私は、此の、此の窓から、遙に巽の天に雪を銀線の如く刺繍した、あの、遠山の頂を望んで投げたのです。……私は目を瞑つた、殆ど氣が狂つただとお察しを願ひたい。

爲業は狂人です、狂人は御覽の如く、浅ましい人間の區々たる一個の私です。

が、鍵は宇宙が奪ひました、此は永遠に捜せますまい。發見せませすまい、決して歸らない、戻りますまい。

小刀をお持ちの方は革靴をお破り下さい。力ある方は口を取つてお裂き下さい。其は如何やうとも御隨意です。

鍵は投棄てました、決心をしたのです。私は皆さんが、たとひ如何なる手段を以てお迫りに成らうと

も、自分で此の革靴は開けないのです。令嬢の袖は放さないのです。

たゞし、此の革靴の中には、私一身に取つて、大切な書類、器具、物品、輕少にもしろ、あらゆる財産、一切の身代、祖先、父母の位牌。實際、生命と齊しいものを啜らず納れてあるのです。

が、開けない以上は、誓つて、一冊の旅行案内と雖も取出不さい事を盟約する。

小出しの外、旅費も此の中にある、  
・  
・  
・  
野宿する覚悟です。

私は「  
と此處で名告つた。

「年は三十七です。私は遞信省に勤めた小官吏です。此の度飛驒の國の山中、一小寒村の郵便局に電信の技手と成つて赴任する第一の午前。」  
 と俯向いて探つて、鐵ぶちの時計を見た。

「零時四十三分です。此の汽車は八分に着く。」

令嬢の御一行は、次の宿で御下車だと承ります。驛員に御話しに成らうと、巡查にお引渡しに成らうと、それは御隨意です。

又、同室の方々にも申し上げます。御婦人、紳士方が、社會道德の規律に因つて、相當の御制裁を御満足にお加へを願ふ。それは甘んじて受けます。  
 いづれも命を致さねば成りますまい。

それは、しかし厭ひません。

が、唯こゝに、あらゆる罪科、一切の制裁の中に、私が最も苦痛を感じるのは、此の革鞄と、袖と、令嬢とゝもに、私が連れられて、膝行して當日の婿君

の前に参る事です。

絞罪より、斬首より、其の極刑をお擇びなさるが宜しい。

途中、田畝道で自殺をしますまでも、私は、しかながらお従ひ申さねば成りますまい。

或は、革靴をお切りなさるか、お裂きになるか。

凡て、聊かも御斟酌に及びません。

諸君が姑息の慈善心を以て、些少なりとも、爲めに御斟酌下さらうかと思ふ、父母も親類も何にもない。

家内は亡くなりました、それは一昨年です。最愛の妻でした。」

彼は口吃しつゝ目瞬した。

「一人の小兒も亡くなりました、それは此の夏です。可愛い兒でした。」

と云ふ時、せぐりくる胸や支へ兼ねけむ、睫を濡らした。

「妻の記念だったので。二人の白骨もともに、

革靴かばんの中なかにあります。墓はかも一ひとまとめに持もつて行くの  
です。

感かんずる仔細しさいがありまして、私わたくしは望のぞんで僻境へきやう孤立こりつの、  
奥山家おくやまがの電信でんしん技手ぎしゆに轉任てんにんされたのです。此この職務しよくむは、  
人間にんげんの生活せいくわつに暗號あんがうを與あたへるのです。一しゆ種ぜつ絶島ぜつたうの燈臺とうだい  
守もりです。

其處そこに於あて、終生しうせい つまらなく言いへば圍爐ゐろり裡ら  
端たの火打石ひうちいしです。神聖しんせいに云いへば靈山れいざんに於あける電光でんくわうで  
す。瞬間しゆんかんに人間にんげんの運命うんめいを照てらす、仙人せんじんの黒くろき符ふの如ごと  
き電信でんしんの文字もんじを司つかさどらうと思おもふのです。

が、辭令じれいも革靴かばんに封ふうじました。受持うけもちの室しつの扉とびらを開あ  
けるにも、鍵かぎがなければ成なりません。

鍵かぎは棄すてたんです。

令嬢れいちやうの袖そでの奥おくへ魂たましひは納をさめました。

誓ちかつて私は革靴かばんを開あけない。

御親類ごしんるゐの方々かた／＼、他たに御婦人ごふじん、紳士諸君しんししよくん、御随意ごずゐいに  
適當てきたうの御制裁ごせいさい、御手段ごしゆだんが願ねがひたい。

お聽きを煩わづらはしました。―― 別べつに申まをす事ことはあ  
りません。」

彼は從容として席に復した。が、あまたゝび額の汗を拭つた。汗は氷の如く冷たからう、と私は思はず慄然とした。

室内は寂然した。彼の言は、明晰に、口吃しつゝも流暢沈着であつた。此の獨白に對して、汽車の轟は、一種のオオケストラを聞くが如きものであつた。

ステイション停車場に着くと、湧返つた其の混雑さ。

羽織、袴、白襟、紋着、迎ひの人数がずらりと並び、禮服を着た一揆を思へ。

時に、赭ら顔の取つた手段は、極めて平凡な、然も常識的なものであつた。

「旦那、此の革靴だけ持つて出ますでな。」

「否、貴方。」

判然した優しい含聲で、吃と留めた女が、八ツ口に手を掛ける、と口を添へて、袖着の絲をきり／＼と裂いた、籠めたる心に揺めく黒髪、島田は、黄金の高彫した、輝く斧の如くに見えた。

紫むらさきの襲かさねの片袖かたそで、紋清もんきよらかに革靴かばんに落おちて、膚はだを裂さいたか、女をんなの片身かたみに、颯さつと流ながれた襦袢じゆばんの緋鹿ひがのこ子。

プラツトフォームで、眞黒まつくろに、うよ／＼と多人數たにんずに取巻とりまかれた中に、すつくと立たつて、山やまが彩いろどる、目まぶ瞼たの紅梅こうばい。黄金きんを溶とかす炎ほのほの如ごとき妙義山めうぎさんの錦葉もみぢに封たいして、ハツと燃もえ立たつ排ひの片袖かたそで、二の腕うでに颯さつと翻ひるがへつて、雪ゆきなす小手こてを翳かしながら、黒煙くろけむりの下もとに成なり行ゆく汽車きしやを遙はるかに見送みおくつた。

百合若ゆりわかの矢やのあと、其そのかゞみよ、と見返みかへる窓まどに、私わたしは急きふに胸迫むねせまつて、何故なぜか思おもはず落涙らくあした。

つか／＼と進すすんで、驚おどいた技手ぎしゆの手を取とつて握手あくしゆしたのである。

其處そこで知己ちがつきに成なつた。

【完】